読売 俳壇

高野ムツオ 選

藤棚の下にも戦の影深き
小田原市　北見　鳩彦

【評】藤棚の下、藤の匂いに包まれて一息ついた。その時、揺れる藤の影に遠国で今も続く戦争の悲惨な影が重なった。戦争は平和な中にもいつの間にか潜むと知らされる。

水平線見てゐるやうな山桜
横浜市　鈴木　基之

【評】山頂近くに立つ大きな山桜。登ってきた作者もその傍の見晴らし台にいるのだろう。ともに遠くに霞む水平線を眺めている。

薔薇赤し樺美智子はデモに死す
横浜市　大井みるく

【評】六月十五日が安保闘争で亡くなった樺美智子の忌日。梅雨入り前だが当日も雨がちだったようだ。雨中の薔薇の赤が今もその死を悼む。

城門を固く守りて若楓
相模原市　はやし　央

春泥の道よ平和の道のまま
村上市　鈴木　正芳

たんぽぽの道をうなりてトラクター
宇都宮市　津布久　勇

花堤ここまで津波寄せしとか
小山市　松本　喜雄

捩り花この世にいまだ戦あり
つくば市　小林　浦波

うつすらと金のすぢ見ゆ桜貝
川口市　清正　風葉

伐採を待つ今生の花万朶
伊勢崎市　大和とき子

小池 光 選

春風の中の老猫充電をしながら今日も動かすしっぽ
横浜市　佐藤　隆司

【評】老いたる猫が春の日差しの中でうつらうつらしている。それを充電中と見立てたところがおもしろい。まるで家電製品のよう。

正木ゆう子 選

住みゐしは「善知鳥安方」雁供養
秋田市　進藤　利文

【評】海鳥の善知鳥には、猟師が善知鳥と呼ぶと、雛が安方と答えるという伝承がある。雁供養も陸奥湾外ヶ浜の伝承による季語。幾つもの物語に包まれた土地に思いを馳せる。

左手はからだ支えて岩清水
長崎市　前田　尚人

【評】松根東洋城の「絶壁に眉つけて飲む清水かな」を思い出しつつ、この句の状況もよくわかる。ごつごつした岩の感触が、掌に蘇る。

片恋や沢の万年雪のごと
つくば市　安藤　健蔵

【評】融けることのない、昔々の思い。「沢」が効いている。ひっそりと胸の奥にあるのだ。片思いなればこそ、遥かな時が経てばこその句。

蟻穴を出づこの世にも地獄あり
鳥取県　表　いさお

抱卵の羽音しきりに春の月
岩出市　沢田慎一郎

浜焼きに切れぬ人波春景色
奈良県　松井　秀仁

かしわ餅餅の部分が好きと言ふ
狭山市　新井　教子

返し馬の葦毛の牝馬風光る
川崎市　沼田　広美

インターホンに仔犬応ふる春の昼
川越市　大野宥之介

春雨にムサシアブミのによつきりと
川崎市　松浦　恵子

栗木 京子 選

秩父路の夕暮れ時の山々は黒い銘仙纏って眠る
所沢市　青木　照子

【評】銘仙は染色した絹糸を使う織物。和服や布団生地などとして活用され、秩父は有数の産地である。山々の纏う夕闇を「黒い銘仙」

小澤 實 選

放課後のモップはギター夏隣
伊勢市　藤田ゆきまち

【評】放課後の掃除の時間だというのに、モップを抱えギターを弾く真似をしている。頭の中にはロックが響き、モップを濡らしもしていない。「夏隣」という季節の解放感。

着ぐるみを脱ぎバイトの子若葉風
行田市　吉田　春代

【評】着ぐるみのすべてを脱いで、かたわらに置き、バイトの子が若葉を吹きくる風にあたっている。仕事に疲れはて放心の表情であろう。

苺パフェ少女掬うや底までも
山梨県　一瀬　利彦

【評】苺パフェを少女がひとり楽しんでいる。下五「底までも」がいいと思った。底に至るまでパフェに集中して、ことばも発していない。

大利根の漣光る風光る
鎌ヶ谷市　三好　弘国

軽トラの座席にラジオ春の風
東京都　中沢　治美

うららかや翁を連れて歩く犬
東海市　中山あゆみ

ハンガーはわが家のものか鴉の巣
下妻市　神郡　貢

種物屋奥行深し灯を吊し
大阪市　今井　文雄

入園式泣きつづけゐる子がひとり
土浦市　平佐　悦子

春愁やATMの印字音
白井市　毘舎利道弘

俵 万智 選

貝殻をいちまい拾うこの海におんなじかたちがもう一つある
東京都　鳥さんの瞼

【評】二枚貝の片方を手にしながら、もう片方へと思いを馳せる。それは、この世に自分と同じ形のものが必ずあるということの心強

津川絵理子 選

いさぎよきたたみジワなり更衣
柏　市　どぐこ

【評】去年の夏服を出してみたら、くっきりと畳み皺がついていた。アイロンを当てなくては、と少し憂鬱。でも「いさぎよき」がカラッとして、この季節の明るさに合う。

子に風船吹かせてかろき肩車
堺　市　椋本　望生

【評】肩車の子が風船を膨らませている。まだ小さい子なのだろう。子の軽さが風船の軽さに通じ、一緒に飛んで行けそうな、軽やかな気分。

塀越えてしゃぼん玉にもある未来
佐野市　村野　則高

【評】すぐに消えてしまうしゃぼん玉なのに、未来があるとは。視点がユニークだ。僅かな時間が、しゃぼん玉にとっては未来なのだろう。

瓦礫山たんぽぽ二つ、三つ四つ
那珂市　綿引多美子

娘の腕の嬰へ四つ葉のクローバー
八幡市　会田重太郎

試歩楽しいろいろ花の苗買ひて
宝塚市　広田　祝世

寄る虻に身振ひひとつ岬馬
霧島市　内村としお

みちのくの七堂伽藍春の蟬
柏　市　柳　哲

筆談の達筆なりし柿若葉
栃木県　あらゐひとし

風光る空に交はる高速路
府中市　天地わたる

黒瀬 珂瀾 選

手作りの土俵でダーニャに続かむと四股踏む子たちビンニツァのジム
東京都　椿　泰文

【評】大関安青錦はウクライナのビンニツァ生まれ。ダーニャは彼の愛称。たとえ戦禍の国であっても先輩への憧れを胸にして、相撲

枝しおり 折

夏石番矢句集『見えない王冠』コロナ禍を経て、著者が14年ぶりに出した第15句集。〈パンデミック猫踏み倒す瑠璃の塔〉
（砂子屋書房、3300円）

神野紗希著『俳句は肯定の文学』著者による初評論集。芭蕉から現代の俳人までの句を対象に、俳句とは何かを考える。
（朔出版、2200円）

◆第69回短歌研究新人賞＝水本麻衣「いつも寝顔を褒められている」（30首）、岡本恵「影の名前」（同）

◆第70回現代歌人協会賞＝小原奈実歌集『声影記』（港の人）、貝沢駿一歌集『ダニー・ボーイ』（本阿弥書店）

◆第17回田中裕明賞＝板倉ケンタ句集『一花一虫』（ふらんす堂）

◆第4回稲畑汀子賞＝伊野部哲也句集『永永無窮』（文学の森）、抜井諒一句集『残影』（KADOKAWA）

題字デザイン・イラスト　福田美蘭

記。◇他の媒体、選者前郵便局留、読売歌（俳）影絵はすずめのこ